



松尾芭蕉

正保1年～元禄7年
(1644～1694)

江戸時代前期の俳人。伊賀上野(現三重県上野市)生まれ。本名松尾宗房。芭蕉は俳号。10代末から北村季吟の指導を受け俳諧に親しむ。その後、俳諧師を志し、延宝6

年(1678)に宗匠となるが、みずからの俳諧を深化させるため旅に出て、「野ざらし紀行」や「奥の細道」などの多数の紀行文や俳句集を刊行。俳諧を芸術の域にまで高めた芭蕉は俳聖と仰がれている。



石川啄木

明治19年～明治45年
(1886-1912)

明治期の歌人、詩人。本名一。岩手県日戸村に常光寺の住職一禎の長男として生まれる。翌年、渋民村に移る。この村で啄木は、両親の愛情を一身に受け育ち、小学校では神童と呼ばれる。

盛岡中学在学中に上級生の金田一京助の影響で「明星」に感銘。17歳の時、文学を志して上京するが、病に倒れ帰郷。20歳で処女詩集『あこがれ』を刊行し、天才詩人の評価を受けるが、生活困窮の現実に直面し、肺結核で不遇の生涯を閉じた。歌集『一握の砂』、『悲しき玩具』、詩集『雲は天才である』等がある。



中市謙三

明治20年～昭和17年
(1887～1942)

俳人、詩人、地方史研究家、野辺地町に生まれる。慶應義塾大学に進み、同校理材科・新聞科を大正3年(1914年)卒業後、野辺地野村銀行や衆議院議員野村治三郎の秘書として勤めるかたわら、県内の文芸雑誌に作

品を発表。野辺地俳句会の結成に尽力した。昭和10年(1935年)、柳田国男が提唱する「日本民俗学講習会」に参加し、雑誌『旅と伝説』に多くの研究論文を発表。昭和11年(1936年)『野辺地方言集』、翌12年「野辺地文選」を発刊している。

愛宕公園に立ち並ぶこれらの文学碑には、野辺地の人々が、俳句や短歌に高い関心を示してきた証が満ちあふれています。
愛宕公園には、こうした文学碑とは異なる多くの石碑や銅像が建てられています。その中でも人々の目を引くのは、何と云っても、花鳥号の銅像です。

この銅像は、明治九年(一八七六)

の明治天皇の東北巡幸の際に、野辺地で倒れた明治天皇の愛馬「花鳥」を刻んだものです。銅像は、昭和四年(一九二九)に建てられましたが、この制作者は岩手県出身の伊藤国男という人で、生涯を馬の彫刻に捧げています。また、この銅像建立のもとになった石碑が、公園の近くの常光寺に建てられており、花鳥号の遺体がある下に葬られています。この石碑には『瘞

御馬銘』と刻まれ、『天関之驪来自米州』で始まる長三州の漢詩が彫られています。
この碑が建てられたのは明治十一年(一八七八)でした。

